



100%
魔法少女
ワレンチナロデー
～誕生篇～

上田ながの
表紙イラスト: 鈴音ね

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『HENTAI 魔法少女サイレントメロディー 誕生篇』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



EVENT★
魔法少女
ワイルドメロデー
～誕生篇～

上田ながの
表紙 / 鈴音れな

登場人物紹介

Characters

ほうせんいんしずね
鳳仙院静音

私立マリーアーク女学園で生徒会長を務めるお嬢様。とにかくペニスで女の子を可愛がりたいと考えているヘンタイさん。

シフォン

魔法少女ミントの侵攻を止めるため、静音を魔法少女へと変身させるために現れた魔法少女。

ミント

人間を抹殺するために魔法界からやってきた魔法少女。

その日、北海道帯広市に住む神崎千尋かみざきちひろの気分は最悪だった。

理由は簡単——ではあるけれど異様なものである。

(何で? どうしてこうなったの?)

千尋は自分には大きな自信を持っていた。一見してすぐに可愛いと分かる容姿に、誰からも好かれる性格。頭もいいし、運動神経も抜群だといえる。それに何よりも自慢なのは、その胸の大きさだ。

同年代の少女達と比べても圧倒的な大きなFカップ。歩くだけでタプタプと乳房は揺れ、男達の視線を鷲掴みにする。それでいて垂れることなく瑞々しい張りを保っているのだ。これを自慢せず、何を自慢しろというのだろうか?

だというのに、その胸が。自慢のバストが——完全に平べったくなくなってしまっていた。膨らみも何もない完全な平原。ぺったんこ。服がスカスカになってしまっている。

(どうして?)

何度も頭の中で問いかけるけれど、答えはどこからも返ってこない。何だか涙が溢れ出てきそうだった。

「何でよ。何か私に恨みでもあるの!?!」

叫びにも近いような声を、アパートの窓から外に向かって飛ばす。

「——へ?」

そこで少女は気付いた。

窓の外。青い空に何かが浮いている。

「ひ、人？」

一瞬夢かと思ひ、目を擦つてみたが、それ——その少女は間違ひなく空に浮かんでいた。魔女を思わせる黒い三角帽子に、白いワイシャツ。その上に纏つた黒いマントが特徴的な少女。金色の髪と、黒いスカートを風に靡かせている。

「な、何で人が空を飛んで？」

自分の身に起きた異常すらも忘れ、千尋は呆然と彼女を見た。

その視線を受けながら、空を舞う少女は徐にワイシャツのボタンを外していく。晒されるのは白い乳房。在りし日のバストを思い出させる程に、見事なまでに張りがある。

「おっき」

高度的には二、三階建てのビルくらいの高さであるから、地上からも丸見えだ。恥ずかしくないのだろうか？ と千尋は考える。

刹那——。

「うわっ！」

凄まじい光が少女の身体——乳首の先端部から放たれた。千尋の視力を完全に奪い取る程の光。そして、千尋の思考はその悩みごと完全に消え去つた。完全なる無が、広がっていく。

その日——北海道は消滅した。

*

ちんこが欲しい。

いや、ちんこと言うよりもチンポ。もしくはペニス。はたまたオマーラ様とでも呼べばいいだろうか？ まあ呼び方なんか正直どうでもいいか。

取りあえず言いたいことは、あの男の股間部についている醜い生殖器官が欲しいということだ。ただ、勘違いして欲しくないのは、別に男になりたいから肉の塊を欲しているわけじゃない。寧ろ男になんかなりたくはない。あれ程醜くて、馬鹿で下劣で、最低最悪な生物はいないからだ。

この女としての美しい身体のまま、少女を泣かせる凶悪なものが欲しいのだ。だからお願いお星様。私にちんこを下さい。

ほうせんいんしずね
鳳仙院静音はそんなことを考えながら、星が煌めく夜空を見上げた。

腰まで届く長く美しい黒髪に、宝石のような瞳を持った美しい少女。身に着けたブレザー制服の胸元は美しい曲線を描き、腰は折れそうな程にキュッと引き締まっている。スカートから伸びる黒いニーソックスに覆われた脚から僅かに覗く白い肌は、絹のように肌理が細かい。まるで職人によつて作り出された人形のように、どこまでも美しい少女——そ

れが鳳仙院静音だった。

革靴でカツカツと足音を鳴らしながら歩くたび、街の人々が必ず振り返る。彼らの顔に浮かぶものは、信じられないものを見たという表情。同時にうっとりで見惚れる視線だった。

清楚、可憐、大和撫子。

純潔、乙女、美の化身。

どんな言葉も静音にはピッタリ合い、どの言葉も静音の前では霞んで見えた。

そんな少女がひたすら星に向かって願ひ続ける。

（下さい。私にちんこ下さい。お願いですからペニスを生やして下さい。ほら、願いを叶えてくれる神様だって見たいでしょ？ 私みたいな美しく、華麗で、何者よりも優れる女の子が、駄目、あつあつ、もう射精^で。オチンポミルク射精ちやうううっ！ とか言ってる姿が）

吹き寄せる風に黒髪を靡かせながら星を眺める少女の姿は、神秘的な印象さえ周囲に与えていた。

そんな彼女の姿を見る人々は、

（やっぱ世界の平和でも考えているのかな？）

（もしかしたら病気の家族のことを心配しているのかも）

（あゝ、あんな娘とセックスしてえ〜）

などということを考える。誰も彼女の本当の願いには気付かない。多分想像することすらできないだろう。

そもそも鳳仙院静音がこんなことを考えるのは、本日の放課後、

『わ、私……会長のことが好きなんです』

後輩の女生徒に告白されたことに理由があつた。

同性に、しかも『私立マリーアークヌ学園』生徒会長に対する告白に、彼女はかなり緊張しているように見えた。小刻みに震える小さな身体。それが静音の目にとっても可愛らしいものとして映つたのである。

だから取り敢えず彼女を生徒会室で抱いたのだが、それが不味かつた。

(……あの娘自体は悪くなかつた。いや、寧ろ本当に最高の身体だつた。緊張した火照つた幼い身体が……あゝ、思い出しても堪らないわ)

桃色に染まつた彼女の肌を思い出すだけで、何だか身体中が火照つてくる。存分に快樂を味わつた後輩の啼泣は決して忘れることはできないだろう。

だからこそ不満が残る。

(私は見たいの、あの娘のすべてが。私の愛撫で感じている姿だけじゃない。ちんこを挿入れられて善がり狂っている姿まで見たいの)

彼女だけじゃない。すべての少女、女性が挿入時にどんな反応をするのか見たかつた。

だったらAVでも見ろという話になるかも知れないが、そんなことできる筈がない。純潔、処女の乙女があんなものを見るなんて恥ずかし過ぎる。それに男が映っていることも気に喰わなかった。だから、現在はエロ漫画とエロ小説で我慢している。

因みに静音が好きなのは陵辱系の漫画、小説だ。特に陵辱系であれば二次元ドリームノベルスがお勧めである。もしもそれらが規制で読めなくなるようなことがあれば、テロを起してもいいとすら考えているくらいに好きだった（注*あくまでも静音の考えです）。と、そうは思うのだが、考え直すと不毛なことこの上ない。

（ああ、馬鹿馬鹿しい。何か時間を無駄にしてるだけね。北海道が消滅して、日本が大変だっというのに、何考えてんのかしら）

大体こんなくだらないことを考えていられる程に、今の世界は平和ではなかった。

三日前に突然北海道が消滅。同時に魔法界とかいうわけの分からない世界から、人間社会に対して宣戦布告が行なわれたのである。

『私の名はミント。魔法界から人間を滅ぼす為に派遣されてきた魔女である。私は宣言する。人間は一人残らず抹殺する。これが魔法界の意思である。お前らの言うところのホックイドーを消滅させたのは、私が本気であることの証である』

世界中のテレビ電波をジャックして宣戦布告を行なったのは、一人の少女だった。黒いとんがり帽子に、黒いマントが特徴的な魔女っ娘である。正直静音の好みドストライクの

少女ではあったのだが……。

（ま、相手が魔女じゃね。色々あの娘の身体で楽しんでみたくないけど、そうもいかないだろうし。っていうか、やっぱ世界は終わりなのかしらね？）

既にミントを迎撃に向かった自衛隊と米国軍は敗北を喫している。多分人間の力では魔法には敵わないのだろう。

（ま、私にできることなんかないか。とつとと家に帰ってエロ小説の続きでも読も）

絶望的な状況だが、個人でできることなど何もない。世の中なるようになるしかないのだ。結局静音とて、事態に流されるだけの一般人でしかないのだから……。

が、そんな考えはこの僅か後、家に帰りついた途端、完全に崩れ去ることとなった。

*

「静音様にお問い合わせがあります。世界を、人間を救って下さい！」

家に帰りついた途端、静音を一人の少女が出迎える。

銀色の髪をおさげにし、中世ヨーロッパ貴族を思わせるような、きらびやかな衣装を身に纏った少女だった。髪と同じく銀色の瞳がミステリアスである。頬に残ったそばかす跡が可愛らしい。好みだ。ただし、面識はまったくない。

「どちら様？」

それでもまったく静音は動揺を見せない。外見だけならどんな時でも常に完璧なる淑女。

「間違いない。こ、これだわ。これ……が魔法の杖!!」

自然と声が震えた。ゆっくりとショーツまで下ろしてみる。途端にポロンと下着からそれが零れ落ちた。

女性には存在しない、醜い形の肉の塊——夢にまで見たペニスがそこに……。

(あつ! な、何か頭の中に流れ込んでくる!?)

認識と同時に、脳内に突然情報が流れ込んできた。

股間のペニスが間違いなく魔法の杖であるということ。この杖を使ってどのように魔法少女に変身すればいいのかということ。そして魔法の杖の名称が。

「な、何で? それって何ですか?」

瞳を見開いてシフオンが訊ねてくる。彼女は完全に混乱の極致にいるようだった。こんな形で魔法の杖が顕現するとは思ってもみなかったのだろう。だから静音は優しく彼女に教えてあげる。

「何って……これが私の魔法の杖——マジカルペニーよ」

「ま、魔法の……つ、え?」

「そうよ。貴女が言ったのよ。魔法の杖は私に最も相応しい形で現れるって。ふふ、まさにその通りよ」

「え? で、でも……そ、それでどうやって……ま、魔法を?」

「そんなの簡単よ」

ニヤツと笑つて静音はシフォンの全身を舐め回すように見つめた。

先程妄想した行為を、もう一度頭の中で再現する。身体を弄べば、シフォンは一体どんな反応をしてくれるだろうか？ 耳朶を舐め、口付けをし、身体中を舐め上げればどんな声で彼女は泣いてくれるだろうか？

想像するだけで、股間のマジカルペニーがムクムクと鎌首をもたげていく。肉茎に浮かび上がる血管。パクパクと肉先が開閉する。ビクンビクンと何度も肉棒は震えた。本物は見たことないけれど、多分——いや、間違いなくかなり大きい部類に入るだろう。

「あ、な、何か……お、おつきくなつてますよ……」

「当たり前よ。貴女みたいな可愛い子を前にして、落ち着いていられるわけがないじゃない……。分かる？ この意味？」

妖艶な瞳で彼女に笑いかける。途端にシフォンは一步後退つた。どうやらこちらがしたいことにピンと来てしまったらしい。

「い、意味って……。そ、そんなの、おか、おかしいですよ。だって、だってシフォン達はお、女同士なんです。そ、それにそんなことをしている暇は……」

「そんなの関係ないわ。これは私が魔法を使える状態に変身する為に必要な行為なんだから。巫女に対してマジカルペニーのトリガーを開放する。そうすることで私は変身するこ

とができるの。この世界を救ってくれって頼んできたのは貴女よ」

「そ、それは……で、でもシフォン……ど、どうしていいか分からないし。そ、そういうことしたことないし」

少女は言葉に詰まる。

「つまり貴女は自分が可愛いから、世界なんかどうなつてもいいって、そう思ってるの？ だとしたら最低よね。は、あ、最悪。貴女の到底信じられない話をあつさり信じてあげて、その上でちゃんと協力までしてあげたのに……ホントがっかりだわ。私は黙ってミントに殺されればいいのね」

大袈裟に息を吐き、首を左右に振ってみせながら、チクチクとシフォンの良心を責め立てた。

（貴女は自分の世界……親を裏切つてまで人間を救いに来たお人好し。当然こんな風に責められたら……）

「……わ、分かりました！」

静音の狙い通り、銀色の少女は部屋いっぱいに響き渡るような声を上げる。

「し、シフォンは……シフォンは本当に世界を救いたいです。命が奪われるところを見たくないんです。で、できます。その為だったら何だってできます！」

「……いい返事だわ。いい子ね」

そう言って笑うフタナリ少女の表情は、どこまでも悪辣なものだった。

「というわけで、早速マ○コを晒して私の前で広げてみせなさい。大丈夫。女同士だから恥ずかしくないわ」

酷い命令であることは百も承知だ。

（だけどこれは仕方ないことなの。だって、巫女の屈辱、恥辱が大きければ大きい程、変身した後の私の能力が上がるんだから）

そういう知識は既に頭の中に入っている。

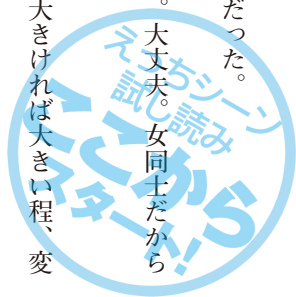
「世界を守る為よ。くくく、そうでしょ？」

無意識の内に邪悪な笑いが漏れ出してしまっていたが、静音は気付かない。シフォンも完全に緊張しているらしく、やはり気付いていない様子だった。

「わ、分かっています」

そう言って頷くと、身体を硬くしながらスカートを捲り上げる。晒されるのは純白のシヨーツ。シルク製の下着が彼女にはよく似合っていた。が、今は下着などどうでもいい。視線で彼女の行動を促す。

シフォンは何度か躊躇しながらも、ゆつくりとシヨーツを脱ぎ去った。髪と同じ銀色の陰毛に隠された秘所が露になる。まだ男を知らない秘裂は、ピッチリと閉じていた。



「なかなか可愛いわよ。それに……こっちもいい匂いがする」

まじまじと少女の生殖器を観察しながら、拾ったショーツの匂いをスーハーと嗅いでみせる。少しだけ汗で蒸れているのが、より静音の興奮を誘った。

そんなこちらの様子からできるだけ視線を外しつつ、シフォンは自分の股間に指を添えようとする。

「ああ待って。立ったまま開かれてもあまり興奮できないわ。いい、そこに仰向けに寝転がって、脚を大きく開きなさい。その状態で、マ○コを大きく開くの。できるわね？」

「……は、はい……」

少女は逆らうことができない。自分から世界を救ってくれと願った以上、どんな行為でも彼女は受け入れなければならなかった。

床に横になり、何度も躊躇いつつも、脚を大きく左右に広げる。それだけで秘裂は僅かに開き、ピンク色の柔肉が覗いて見えた。だが、勿論それだけでは終わらない。静音が「さあさあ」と促すと、シフォンは「わ、分かっています」と震え声で頷き、躊躇しながらも自らの秘裂を指で左右に押し開いた。

クパアツと肉壁が露になる。穢れを知らない純潔処女の肉孔が、静音の視界にはつきりと映り込んだ。どこまでも綺麗で鮮やかなピンク色をしている。

「ちっちゃくて、狭くて……凄く締めりが良さそうなマ○コね。それに、もう濡れてるわ。

もしかして、見られてるだけで感じちゃった？」

自分の最も恥ずかしく、大切な場所を見せているという事態に興奮を覚えたのか、確かにシフォンの柔肉はうっすらと潤んでいた。光を反射してテラテラ光る肉壁が艶かしい。呼吸するように、僅かに蠢いてもいる。

「ぬ、濡れてなんかいません。う、嘘をつかないでっ！」

だが、それを簡単に少女は受け入れない。律儀に秘裂を開いたまま、静音の言葉を否定する。自分の反応を受け入れられない少女の姿は、静音の瞳には本当に可愛らしく映った。こんな娘が乱れる様を思う存分楽しみたい。マジカルペニーがより大きさを増した。

「嘘じゃないわよ。ほら、これがその証拠」

我慢できる筈がない。ずっとこの瞬間を夢見てきたのだ。普通とは言い難いけれど、この好機を見逃すわけにはいかない。

勃起した魔法の杖の先端部を躊躇なく蜜壺に密着させる。くちゅりという淫らな音が一瞬間こえた。

「え？ な、なんつ、何ですか？ い、いきなりっ!? いきなりそんなっ!?」

マジカルペニーの感触に、シフォンは驚きに瞳を見開く。もう少し心の準備的なものがあると思っていたのだろうか？

(でも駄目。私が我慢できないもの)

静音は舌舐りをする。

「大丈夫よ。前戯なんかしなくても、貴女のここは十分濡れてるから。だから、私のちんこだって簡単に飲み込めるって。ほら、ほらほら……んっ……は、挿入はいっていくわ」

簡単に挿入できる程には、愛液は分泌されていない。が、その辺は流石に魔法の杖だ。ヌルヌルと肉茎自体が粘液に覆われ、陵辱の補助をしてくれる。

ぐぶ、じゅぶぶ、じゅぶぶぶう……。

「んあっ！ は、挿入って、挿入ってくっする！ あっあっあっ！ だ、駄目！ やめて、まだ、まだ心の準備がっ！ んひいっ！」

ペニスが肉孔を拡張していく。肉襞を巻き込みながら、少女の胎内へとズルズルと潜り込んでいった。あまりに突然過ぎる挿入劇に、銀色の巫女は悲鳴を上げ、何とか静音を制止しようとする。だが――。

「あっ！ す、すごっ！ スゴイツ！ こ、これが、これがペニスの快楽っ！ か、絡んでくる！ 貴女の――し、シフォンのマ○コが絡んでくる！ あっ！ すご、きも、気持ちいい！ 温かくて、身体中が包まれてるみたい！」

初めて女体を味わった静音は止まることなどできなかつた。

自分の神経と直接繋がったマジカルペニーに、柔肉が絡みついてくる。ウネウネと柔らかく、それでいてペニスを千切りそうな程に締めつけてくる膣壁の圧迫に、鳳仙院静音は

完全に溺れていた。

「ずごっ！　ぐじゅぼおっ！」

容赦なく肉棒を奥へ奥へと捻じ込んでいく。そのたびにシフオンは身体をビクビクと震わせ、顔を左右に振った。

「ふとっ！　か、かった、硬いつ！　だつめ、お、おおき、大き過ぎますっ！　ふはっふはっ！　い、息が、息が詰まって——ひっ！　そ、そこはっ！　そ、それ以上は、だ、駄目ですっ！　や、やめって！」

やがて膣内の肉先が何かに触れる。途端にシフオンは顔を青褪めさせた。一瞬で彼女の表情から血の気が引いていく。

「ふふ……ああ、成る程。これ……はあはあ……これがシフオンの処女膜か」

静音はすぐにそれが何であるかを理解する。口元には心底嬉しそうな笑みが浮かんだ。

「だ、駄目です。や、やめて……こ、こういうのは……は、初めてはほ、本当に好きな人に捧げるものだって……」

ポロポロとシフオンの眈からは涙が溢れ出した。本気で怖がっている。人々の為、世界の為にならば故郷を裏切ってもいいという決意はあっても、処女を失う決意はなかったらしい。

そんな姿がゾクゾクと静音の嗜虐心を煽る。

「は、発情なんかしてないっ！　　そ、それに、ホントにつ、ホントになんかでちゃうのっ！　こわいっ、怖いのっ！　やめっ、やめてえっ！　も、もうだ、だつめ、こ、これいっじょうは——ひっひっひっひっひいっ！」

性の悦楽を知らない肉体では、到底耐えきれぬ筈もなかった。少女の肉体はすぐさま、快楽の高みへと上り詰めていく。静音の口腔内では乳首が激しく痙攣を繰り返す。

「でっる！　おっぱ、おっぱいでっるのおっ！　おっおっおっおっおっおっ！」
びゅぶばっ！　びゅばああああっ！

遂には魔力が大量の母乳となつて、静音の口腔内に噴き出した。

「んぐぐっ！　んっがぐっぐっ！　んえっ！　んくっ……ごきゅっごきゅっ……」

甘味を帯びた味が広がる。これまで静音が口にしたどんなものよりも美味しい味だった。ゴクゴクと喉を動かし、魔力ミルクを喉奥へと流し込んでいく。

（美味しい。こんなに堪らない味がするなんて……）

『そ……それは魔力の塊です。その……魔女にとって魔力というのは、い、一番必要なものですから』

だから美味しく感じる。恥ずかしがりながら、シフォンが説明してくる。

「いやらしい味がするわよ。ほら、こんなに私の口に絡んでくる。貴女がどれだけ淫乱か
つてことが、この味だけでも分かるわね」

わざと口を開き、グチュグチュと口腔内の乳液を見せつけてやった。口の中で白濁液が糸を引く。

「ぐすつ……ち、畜生……畜生……」

ミントは半泣き状態だった。グスグスと鼻を鳴らしながら、目頭を潤ませている。それでも涙を流そうとしないのは意地の為だろうか？

「か、必ず後悔させてやる……後悔させてやるからな」

最悪な状況でも、彼女は諦めていない様子だった。それが静音には嬉しい。

（意思の強い娘は好きよ。強ければ強い程、墮とし甲斐があるから。しかし、この凜とした態度。まるで騎士みたいね。セシリアとかアクエアルとかルリアとか……。騎士が乱れる様は大好き。だから……。もつと見せて）

「後悔？ そんなことを言っているのかしら……。きっと後悔するのは貴女のほうよ。だって、まだまだ私は満足していないんだから」

どこまでも優雅にサイレントメロディーは笑ってみせる。

「——っひ」

黒い魔女の顔に、恐怖の色が燈った。

*

「うああっ！ んひっんひいっ！ も、もう出ません。これ、これ以上はでないんれしゅ

うっ！ くひっ！ ま、またっ！ また射乳しちゃうっ！ 射乳してイッちゃうっ！」
びゅぶっ！ びゅつばああああつ！

空中で行なわれる搾乳行為は止まることを知らなかった。

ミントを大の字を描くような形で空中に触手で磔にし、ひたすら肉紐と共に母乳を搾り取り続ける。ビュッビュッと定期的に噴出する魔乳。そのたびに黒い魔女は涙と鼻水に塗れた無様なアへ顔を晒した。

散々魔力を吸い尽くしたお陰なのか、掌にも収まりきらない程あつた乳房は、今や完全な平らになってしまっている。貧乳ツルペッターン——それこそがミントの本当の姿のようだった。

「んちゅ……んちゅう……はああああ……んふ……流石に出が悪くなってきたわね。こんなに平らになっちゃって」

ぷちゅりつと乳首に吸いつけていた唇を離す。唾液でできた半透明の糸が、口唇と乳頭の間伸びた。胸元は唾液と粘液でベトベトに汚れている。絶頂による余韻に肉体が包まれているのか、ミントは「ひゅーひゅー」と息を吐くだけで、まともに動くこともできない様子だった。

「こ……この……や、ろう……」

それでも力なく静音を睨みつけてくる。

「ホントに可愛いわね。ここまでやってまだまだ抵抗する気力があるなんて……。だから、それに敬意を表して、更なる快樂を与えてあげる」

語りながら静音はミントのスカートを捲り上げた。白と水色の縞々ショーツが姿を現す。散々与えられた快樂の為なのか、下着は既にぐしょぐしょに濡れていた。下着生地の上からでも、陰唇の形がはっきりと分かる。そのショーツに指をかけ、ゆつくりと引つ張つていった。

「や、そこはっ！」

パンツゴムが伸びる。ピリッと破れるショーツ。既に左右に開いた秘裂から、僅かに白濁とした粘液が垂れ下がる。

ピンク色の柔肉。静音が見惚れる程に美しく、鮮やかな色をしていた。ヌラヌラと分泌された愛液で妖しく輝いている。呼吸するように蠢く肉壁が、見るものをより興奮させた。「やっぱり処女マ○コね。こんな小さいマ○コなんて……凄く締まりが良さそう。ちんこを突っ込んだら、どんな声で貴女は泣いてくれるかしらね？」

肉先をクチュリッと膣口に押しつける。

「や、やめろっ！ それだけはっ！ それだけはやめろおっ！」

先程まで死体のように力が抜けていたというのに、この事態にミントはこれまで以上に声を張り上げる。

「だぐめ」

だが返ってきたのは無情な一言。

「大丈夫。一瞬で処女を奪って、すぐに快楽を覚えさせてあげるからね」

どこまでも魔法少女は残酷に咬くと、何の躊躇も躊躇いもなく、膺奥まで一気に肉槍で少女の蜜壺を貫いた。

ぶぢっ！　ぶぢぶぢぶぢぶぢいっ！

「んぎっ！　んおおおっ！　ああああああつ！　ひぎっ！　ひぎいっ！」

少女の口から悲鳴が上がる。どこまでも痛々しい悲鳴。

「あ、あああ……お、おか、犯されてる……んひっひっひ……に、人間……人間なっんかに、わた、わたっしがあつ！　いやっ！　いやあああ——あぎっ！　うごっ、うごっくなあつ！　ご、ごりごりって、ま、マ○コ削るなあつ！」

じゅごっじゅごっじゅごっ！

破瓜したばかりの少女でも遠慮はしない。静音は自分自身の快楽の赴くままに、激しく腰を振りたくる。

「おっおっおっ！　す、すっごい、しま、しまつる！　ふんふんふん……こ、これは、す、すっぐに、すっぐにで、射精ちやいそつう！　おっおっおっ！　も、もう、もうだつめだ！　く、で、射精るっ！」

びゅぐぼっ！　びゅぼばあっ！　どびゅっ！　びゅぶるるるうっ！

先程まで散々自分自身で肉棒を扱ってきた為か、僅か二、三度腰を振るだけですぐに静音は絶頂に達してしまった。

「おひあっ！　な、ながれつつくる！　あ、熱いのが、熱いのがわたしの、子宮、子宮に流れ込んでくるうっ！」

ドクドクとポンプのように肉棒が震えるたび、静音の肢体を肉悦が包み込む。多量のザーメンを、ミノトの子袋に向けて流し込んでいった。一瞬で蜜壺は白濁液に満たされ、少女魔女は涙を流す。

「あっあっあっ……も、もうい、いやっ……ぬ、抜いて……抜いてよお……」

ボタボタと結合部から入りきらなかった精液が溢れ出す。静音と繋がりあったまま、ミノトは子供のように泣きじゃくった。

「……ごめんね。抜くのはまだ無理。一回射精だしたくらいじゃ、私はまだまだ満足できないから。だからね……もつと一緒に楽しみましょう」

泣いている姿が可愛い。だから射精を終えた肉棒も衰えることがない。

ニヤッと笑う静音の表情はどこまでも邪悪だった。

*

「おっおーおーおー！　ま、まだ射精るっ！　まだまだ射精るっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>